相模経済新聞　2019年4月10日号

宇宙生命哲学

ことはじめ

12

北里環境科学センター理事長／宇宙生命哲学者
伊藤　俊洋

スペース・フォース（宇宙軍）の危うさ

我が国にとって最近の明るいニュースの一つは、はやぶさ2による小惑星「リュウグウ」への完璧なタッチダウンといえよう。この後、はやぶさは、「リュウグウ」の表面に銃弾を撃ち込み人工のクレーターを作り、そこから地下試料を採取して、3億キロメートル離れた地球に持ち帰るという。宇宙探査技術の進歩は、止まることを知らない。このような宇宙の科学技術は様々な形で社会に役立っている。例えば、車・電車・航空機・船舶など、ほとんどの移動システムは、GPS（Global Positioning System）搭載の地上位置観測衛星からの情報により運行されている。気象衛星ひまわりからは、大気圧、大気温、海水温、風向、風力、海流などの情報が伝送され、過去のビッグデータをも取り入れて、瞬時に気象予測が組み立てられる。

社会の根幹を担う政治・経済・科学・医療・文化・芸術・宗教などの最新の情報も、いわゆる国際衛星航法システム（GNSS）により世界を瞬時に駆け巡る。その民生利用により、世界規模の戦争、世界恐慌、地球規模での感染症の発生などは、辛うじて避けられてきた。国際的な協力関係のもとに構築されたこのシステムは、人間社会を安心・安全に保ち、生活環境をより心地よいものにするための仕組みである。

宇宙には人工衛星がいっぱい！

一方、地球上には、国境、領海、制空権という国家規模の境界があり、この境界を挟んで国家間に紛争が絶えない。ここで大きな役割を担うのがGNSSの軍事利用である。敵情把握、ミサイルなどの兵器の誘導、敵のミサイルの探知センサー搭載早期警戒衛星など、最新のAIを搭載した装備は、現代の戦争を益々先鋭化させている。

宇宙空間に打ち上げられた凡そ8500個の人工衛星は、平和目的と軍事目的の両面で役割を担っている。役割を終えた多くの衛星が宇宙ゴミとして浮遊しており、この宇宙ゴミの処理も国際間の喫緊の課題である。この領域に、武力を背景にした宇宙軍という概念が持ち込まれると、地球文明の将来は風前の灯となる。「宇宙生命哲学」の最も重大なコンセプトは、時空を超えた高次元地球環境生命体の保全である。私は、宇宙軍という概念を地球の人工衛星軌道領域に受け入れることは、極めて危うい状況であると考える。